

第1回緊急事態宣言に伴う小学校休業と学校動物飼育への影響

中島由佳

新型コロナウイルスの蔓延により2020年4～5月に第1回緊急宣言が発出された。それに伴い、全国の多くの教育機関では約1ヶ月の臨時休業となった。また再開後も小学校では、学校での動物飼育に関して様々な工夫や制限を余儀なくされている。そこで本研究は、コロナ禍による臨時休業が小学校での動物飼育に与えた影響を検証すべく、休業中・再開後の動物飼育の状況について調査を行った。

方法

調査時期 学校が再開され夏期休業を経た2学期以降（2020年9月～2021年1月）

調査方法 本調査の趣旨を説明する鑑文を添え、愛知県、岡山県、群馬県、滋賀県、新潟県、福岡県の各地域の教育委員会、獣医師会、獣医師を通じて、動物飼育を行っている小学校に質問票を配布。電子ファクスを主に使用し回答を求めた。質問内容は以下の通り。

1. コロナ流行前の飼育動物の種類と数(屋外/屋内飼育)
2. コロナ流行に伴う飼育の状況について
 - (1) 休業中の世話(餌やり・掃除など)は、誰がどのように行っていたか
 - (2) 再開後の世話は、誰がどのように行っていたか
 - (3) 現在、児童は学校動物に触れたり世話をしたりしているか

3. コロナ禍長期化での、動物飼育を行う上での問題点は？
4. 現在飼っている動物がなくなった場合、新たに購入するなどして飼育を継続？
5. 子どもたちにとって学校での動物飼育は今後も必要？
6. 長期休業中に獣医師が動物を預る仕組みがあれば利用したい？
7. 学校での動物飼育について思うこと、お考えなど(自由記述)

結果

調査に対し257校より回答が寄せられ、有効回答248校分のデータを分析した。

コロナ流行前の飼育動物の種類と数(屋外/屋内飼育)

「飼育を行っている」と回答の227校の飼育動物の内訳は図1の通り。

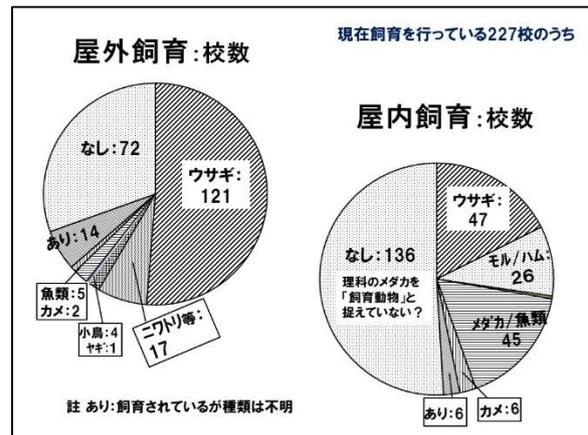


図1 コロナ流行前の飼育動物の種類と数

2(1) 休業中の動物の世話

飼育を行っていた227校の、休業中の動物の世話担当の内訳は図2の通り。教職員が飼育の担い手となった学校が大半であった。

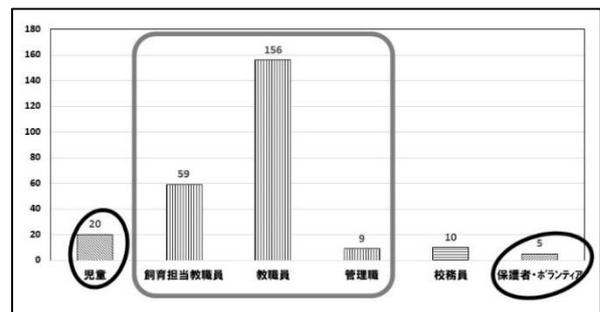


図2 休業中の世話担当の内訳

2(2) 学校再開後の動物の世話担当

内訳は図3の通り。担当学年(生活科、総合的な学習)および飼育委員会の児童が主に世話に関わっていた。また担当職員も児童とともに飼育に関わり、「土日・三連休は職員が世話」との記述も見られた。

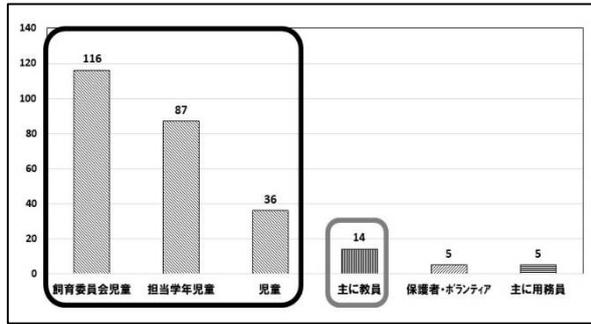


図3 学校再開後の世話担当の内訳

2 (3) 現在の児童と学校動物との関わり

動物飼育を行っている 227 校中 16 校が「児童は関わっていない」と回答、211 校は「何らかの形で世話かふれあい」を行っている」と回答した。ただし、ふれあいの内容についての記述を分析すると、2つの傾向が明らかとなった。すなわち、

- ・「触れさせないように」している。世話のみ（魚類のみの学校を除く）：21 校
- ・世話だけでなく「ふれあっている」ことを明記：16 校

後者は、「ふれあいタイムを設ける」、「密にならないよう気を付けて触れ合う」、「ふれあい教室」、「来たい子が来て触れ合っている」などの例示が見られた。また後者の中の 12 校では、委員会・担当学年以外もふれあいが行われていた。

この傾向の差異は「動物飼育の捉え方」が関係することが次の 3 の回答からうかがえる。

3 コロナ禍長期化での動物飼育の問題点

記述回答からは、コロナ禍下において学校が感じる「動物飼育への懸念」は次の 4 点にまとめる（図 4）。すなわち、

- ① 飼育動物からのコロナ感染：コロナウィルスが人獣共通感染症を引き起こすとの懸念
- ② 三密によるコロナ感染：動物の世話・ふれあいにおいて三密が発生し児童間でコロナ感染を引き起こす事への懸念

また「児童が世話して良いのか」との回答からは、①、②双方への懸念がうかがえる。

- ③ 教員の負担：これまでの学校動物飼育の負担および、コロナ禍の中で学校動物飼育を児童に行わせるための工夫等の負担
- ④ 児童が十分に動物とのふれあい・世話ができないとの問題意識

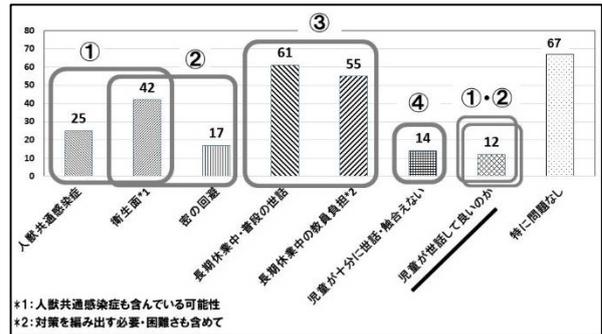


図4 コロナ禍長期化の中で動物飼育の問題点

4 現在飼っている動物がなくなったら購入などして継続するか？

左側の全ての飼育校、右側の鳥哺乳類の飼育校のグラフとも、「わからない」の学校が過半数であった（図 5）。

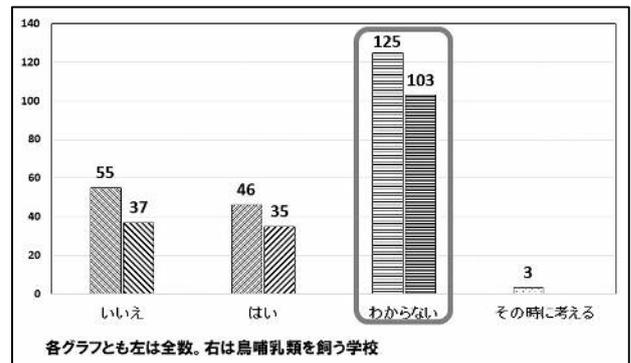


図5 購入して飼育継続するか

5 子どもたちに学校動物飼育は今後も必要か

しかし、「子どもに学校動物飼育は必要か？」との問いに対しては「必要」との考えと「必要だが難しい」との考えがほぼ同数であった。特に鳥類、哺乳類を飼育する

研究報告

学校では「必要」との意見が多かった。また、「必要だとは思いますが、一部の児童しか関わっていない」、「一長一短」、「動物の健康を維持する十分な体制がなければ、飼育しない方がよい」等のコメントも見られた。

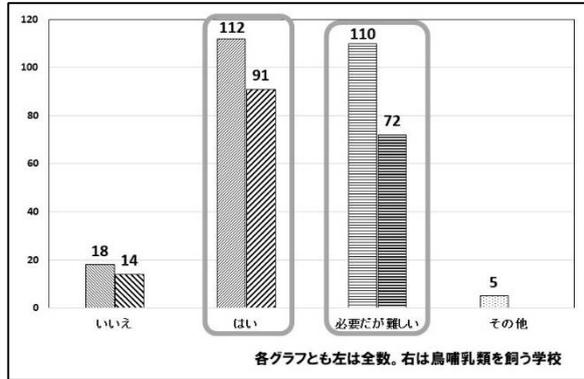


図6 子どもたちに学校動物飼育は今後も必要か

6 長期休業中に獣医師が動物を預かる仕組みがあれば利用したいか

問4, 5における回答結果は、「学校での動物飼育は必要・重要とは思いますが、実際には負担が大きい」との従来的心情が、コロナ禍下でも示されていると言える。

そこで、「長期休業中に獣医師が預かる仕組みがあれば利用したいか」との問いを設けたところ、肯定的な回答が寄せられた(図7)。

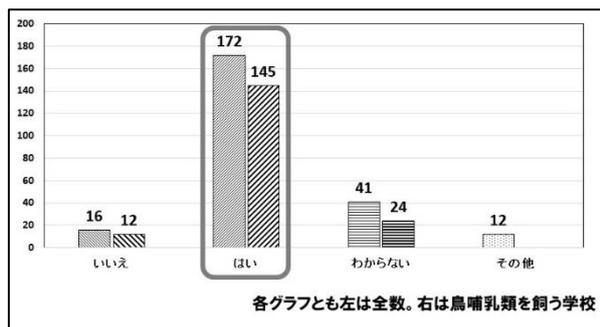


図7 長期休業中に獣医師の動物預りの仕組みがあれば利用したいか

一方で「予算がつけば／無償ならば利用したい」、「すべてではなく部分的に利用したい」等のコメントとともに、「ありがたいが動物の移動等の課題が生じるのでは？」

などの具体的課題に関する意見も寄せられた。

また、「現在も長期休業中は、獣医師が預かってきている」、「保護者のボランティアをお願いしている」等、現在受けている地域のサポートを挙げるコメントも寄せられた。

考察

今回の調査結果への考察を最後に述べる。

○学校飼育動物への誤解

少なからぬ学校が「動物から児童にコロナ感染するのでは」との懸念を感じていることが明らかになった。しかし、これまでに他国の動物園での飼育員から動物への感染、ヒトからペットへの感染は報告されているものの、飼育動物から人への感染は報告されていない(厚生労働省, 2021)。

「学校飼育動物から児童へのコロナ感染は起こらない」との正しい科学的知識を教員が認識するとともに、動物の定期検診や飼育指導を行っている学校獣医師よりの教員・保護者への説明も必要とされる。

○学校が抱える厳しさ

コロナ禍の中で、学校での動物飼育を取り巻く状況はさらに厳しくなっていることも今回の調査結果からはうかがえる。長期休業中の世話は、明治の動物飼育開始期より既に課題であった(松田, 1908)。これに加え、鳥インフルエンザ流行は学校飼育動物の減少の契機となるとともに、教員の飼育負担を増加させた(中島, 2020)。

そして、近年加速する安心安全への目配りやアレルギー等への配慮の必要性は、コロナ禍の発生によりさらに留意すべき問題となったと示唆される。「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」等に対する迅速な対応が求められるとともに、学校での

研究報告

感染を避けるための工夫・配慮を日々迫られる中、学校での動物飼育は「教職員の努力だけではもう限界では」との声が、学校内からも地域からも挙がっている。

○学校をサポートする地域学校共同活動の必要性

このような現状において、学校での動物飼育を地域でサポートする「地域学校共同活動」が不可欠であると、本研究は考察する。

各地域の学校動物飼育においても既に「地域の保護者の有志による休日の動物の世話」「クラスの家庭でのホームステイ」「3連休以上の長期休業中に地域の獣医師さんに預かってもらう仕組み」など、地域と学校が共同して学校動物飼育活動を行うシステムが存在する。これらの地域の知見やノウハウを、学校動物飼育を行っている各校・地域間で共有し、学校動物飼育を支える仕組みを構築することが重要と、本研究は考える。

学校での動物飼育は他者への共感性や思いやりを育むことは様々な実証報告が寄せられている(例えば中島・中川・無藤, 2011; 中島, 2020)。「動物にとって幸せな飼育環境」「教員の負担軽減」「動物飼育で優しい子に」の3つの共存が可能な学校動物飼育の未来を願って止まない。

○本研究の限界

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。本調査は緊急事態宣言に伴う小学校

の臨時休業および再開後の動物飼育について最大限迅速に調査することを重要視した。このため、調査をお願いできた地域に偏りが生じ、必ずしも全国的な傾向を表す結果ではない可能性がある。また、多義的な自由回答に関しては文脈等から判断し分析を行ったため、解釈の正当性に疑問が残る。今後はより多くの地域より報告を受けて、本研究結果への補足を行っていく必要がある。

本調査実施にあたりお世話いただいた獣医師会、獣医師の先生、教育委員会、小学校に心よりお礼申し上げます。

(大手前大学教授)

引用文献

厚生労働省(2021) 新型コロナウイルス感染症について—動物を飼育する方向け Q & A (7月7日時点版)

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/doubutsu_qa_00001.html 2021年11月28日閲覧

松田良蔵(1908). 動物の飼育 初等教育研究会(編) 教育研究, 52(7), 42-47.

中島由佳(2020). 鳥インフルエンザ後の学校動物飼育の実態調査および子どもの心理的発達への飼育の効果 日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(代表 中島由佳) 報告書

中島由佳・中川美穂子・無藤 隆(2011). 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響 日本獣医師会雑誌, 64, 227-23. doi:10.12935/jvma.64.227